

19世紀米国ユニテリアン主義における教典の脱文脈化

著者	庄司 一平
雑誌名	論集
巻	44
発行年	2017-12-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/00130353

19世紀米国ユニテリアン主義における 教典の脱文脈化

庄 司 一 平

はじめに

日曜学校における指導書『ユニテリアン信仰の手引き』（1884年）に、ユニテリアン主義の一般的信念が一見わかりやすく解説されている。ユニテリアン主義が「教育・博愛・社会改良」を中心的課題とするキリスト教的宗教集団を形成していることや、理性的な議論や意見の修正に開かれた暫定的信条を掲げていることについては、『手引き』はきわめて明快である。人間にとっての宗教の普遍性、世界の諸宗教に対するキリスト教（プロテスタンティズム）の優越性、ユニテリアン主義の反・三位一体論その他ユニテリアン主義の概要を解説した全21講にそれぞれ教典的根拠が示され、自由討究のための基礎的および応用的な問題が付された教科書的な体裁をとる本書¹の中で、聖書は次のように解説されている。「啓発された魂の言明に満ちあふれた」「聖なる書物」で、「人間の経験、悲しみ、喜び、誘惑、罪、後悔、信頼、希望、愛に満ちあふれる」が、「人間的であり、それゆえ過ちやすく」、「異なった時代に多くの著者によって書かれているため用途も価値も多様な」ものである。「至上の道徳的および霊的な真理の教師」としての権威は揺るがないものの、聖書の無謬性に対しては、〈聖書のどこにも、無謬性の主張や仮定はなされていない〉〈聖書には、無謬性の理論にとって致命的な誤りや矛盾が含まれている〉〈使徒パウロは、その教えが部分的・地域的・時代的であることを明確に述べている〉として、強

1 James Freeman Clarke, *Manual of Unitarian Belief* (Boston: Unitarian Sunday-School Society, 1884). 各講の表題は次の通り。「人間にとって必然的な宗教」「キリスト教」「ユニテリアン主義」「聖書」「神に関する信念」「三位一体」「イエス・キリスト」（無論この表現には但し書きが付されている）「キリストに関する信仰と信念」「キリストの業」「聖霊」「人間に関するユニテリアンの信念」「贖罪と和解」「回心と再生」「祈り」「教会」「信条」「自由で理性的なキリスト教」「宗教的義務」「来世」「試練・審判・報い」「天国と地獄」。

く反対が表明されている²。

ここでひとつ疑問が生じる。神学的・教理的な問題について、ユニテリアン主義が「致命的な誤りや矛盾」を含む教典（聖書）に多くを依拠している点についてである。

以下の小論は、従来自明視されていた教典（「聖典」及び「正典」）の聖性と正統性がさまざまな理由で揺らぎ、再定義や再構成を余儀なくされていった19世紀米国（および英国）における、特定の知の体系およびそれを担う知識社会を考察の対象としている。教典の脱文脈化および再文脈化は、あらゆる歴史的テキストに内在する特性であるが、ここでは19世紀米国ユニテリアン主義の展開に光を当てる。まずは英国におけるユニテリアンを含む非国教会派³による聖書翻訳をその前史として位置づけた上で、トマス・ジェファソンによる福音書の編集を自己流の合理主義的教典解釈の一例として、さらにトランセンデンタリズムにおける「諸民族の聖書」という一連のプロジェクトを比較教典の例として、それぞれ取り上げる。つまり、翻訳・編集・比較という三つの局面それぞれにおける、教典の意味づけの変化とそれらが組み込まれた文脈との相互作用が例示される。そして、ユニテリアン主義と近代宗教学の思想的な共通基盤が形成されてきた軌跡が、ほんの一部ではあるが明らかにされる。

なお小論では、教派的および信条的に同格なものを「ユニテリアン主義」として対象化している。この語には近代主義的な宗教性への志向それ自体が含意されており、「宗教的自由主義」「合理主義的信仰」などで代替可能な面もある。しかし、「不信仰」とも「世俗主義」とも言い切れない何らかの宗教性へのコミットメントを、「ユニテリアンの」としか言いようのない特異性に着眼することで浮き彫りにするために、語の歴史的負荷を意図的に利用していることをここに明記しておく。

2 *ibid.* 14-15. 知識の有限性について、「テモテへの手紙二3:16」「ペトロの手紙二1:21」「コリントの信徒への手紙二2:10-16」「コリントの信徒への手紙一13:8-12」が反例の根拠に挙げられている。〈〉内は原文イタリック。

3 “dissenters” は、英国ではバプテスト、会衆派、長老派、クウェーカーなど国教会側から見た政治的反体制派を指す一方、公定教会を原則としてもたない米国では、主流派および福音派のプロテスタントから見て〈不信仰に近い〉反体制派を表す用法がある。e.g. Martin E. Marty, *The Infidel: Freethought and American Religion* (New York: Meridian, 1961); Edwin Scott Gaustad, *Dissent in American Religion* (Chicago: The Chicago University Press, 2006).

1. 「ユニテリアン訳」聖書

1808年とその翌年、ロンドンとボストンで新約聖書の英語改訂訳⁴が出版された。しばしば「ユニテリアン訳」と呼ばれてきたこの版には、とりわけ英国において数々の辛辣な批判⁵が寄せられ、三位一体論の否定というユニテリアン主義の中心的教理が論争の大きな焦点となっていた。「ユニテリアン訳」と呼んだのは批判者側であったが、「ユニテリアン主義の諸教義に適うように改訂された新訳でしかない」⁶「完全に、ユニテリアン主義の大義を促進するために作成された、たんなるつぎはぎの訳」⁷といった批判が必ずしも誇張でなかったことは、『改訂訳』における三位一体論の扱いにより確認することができる。

幾つか例を挙げると、三位一体論をほとんど唯一明示的に述べた「ヨハネの

-
- 4 *The New Testament, in An Improved Version, upon the Basis of Archbishop Newcome's New Translation with A Corrected Text, and Notes Critical and Explanatory* (London: Richard Taylor and Co., 1808). 米国版は同 (Boston: Thomas B. Wait and Co., 1809). 元々は、キリスト教知識普及協会 (A Society for Promoting Christian Knowledge and the Practice of Virtue by the Distribution of Books, 1791年ロンドンにて設立) が、神学的にも政治的にも反国教会派の古典学者 ウェイクフィールド (Gilbert Wakefield, 1756-1801) に持ち掛けた出版企画であった。彼には世俗的な聖書解説 *Silva Critica: Sive In Auctores Sacros Profanosque Commentarius Philologus* (London: 1789-95) の他、*New Translation of Those Parts Only of the New Testament, Which Are Wrongly Translated in Our Common Version* (London, 1789) や *A Translation of the New Testament* (London, 1791) の英訳実績もあった。小ピット政府に関する筆禍・投獄事件及び出獄後の病死のため、ニューカム (William Newcome, 1729-1800) の訳 *An Attempt towards Revising our English Translation of the Greek Scriptures, or the New Covenant of Jesus Christ; and toward Illustrating the Sense by Philological and Explanatory Notes* (Dublin, 1796) が採用された経緯がある。ニューカムもすでに他界していたが、新訳を出版するよりは当時定評のあったグリースバツハ版テキストに拠っていたニューカム訳で協会が合意した、というのが実情のようである。“Introduction,” *An Improved Version*, iii-xxvi.
 - 5 代表的なものとして次の2点を挙げておく。Edward Nares, *Remarks on the Version of the New Testament, Lately Edited by the Unitarians, with the Title of “An Improved Version Upon the Basis of Archbishop Newcome's New Translation with A Corrected Text, and Notes Critical and Explanatory, London, 1810;” Being A Dispassionate Appeal to Christians of Various Denominations on Some of the First and Most Generally Received Doctrines of the Bible* (London, 1810); Richard Laurence, *Critical Reflections Upon Some Important Misrepresentations Contained in the Unitarian Version of the New Testament* (Oxford, 1811).
 - 6 Laurence, *Critical Reflections*, 1
 - 7 *ibid.* 176.

手紙一」5:7（三者による証し）について、従来のいわゆる「欽定訳」（Authorized Version）の訳語を示した上で、「三位一体の教理を証明するために付け加え」られたこの節は、信頼できる写本の不在を理由に、「宗教改革以来の多くの版において」（グリースバツハとニューカムを含め）省略されてきたことが注記され、本文から削除されている⁸。また、「テモテへの手紙一」3:16（肉における顕現）については、「欽定訳」の“God was manifested in the flesh”を“He who was manifested in the flesh”に代え、「明らかに実在の人間であり、適当なひとりの人間であり、グノーシス主義者やキリスト仮現論者が教えるように、たんに人間の外見を纏った者ではない」と注記することで、イエスと神との明確な区別を示唆している⁹。さらに、「ヨハネによる福音書」3:13（天から降って来た者、天に上った者）の注釈では、「天から降る／天に上る」を、神の真理を探し求め知る／神の真理を見出し世界にもたらす、と比喩的に解釈することで、イエスの神性・超越性を間接的に否定する立場を表明している。「マタイによる福音書」25:46（正しい人たちは永遠の命にあずかる）については、静態的な形容詞“eternal”を「長期的だが有限的な持続を表す」“everlasting”に代え、「永遠の悲惨という過酷な教理を容認するのではなく、むしろ、悪から徳および幸福への究極的回復という、より喜ばしくより起こりそうな仮説にとって、好ましいものへ」といういわば現世主義的な解釈変更を行っている¹⁰。

ユニテリアン主義的な（より広義には非国教会派による）聖書英訳の営為には、「欽定訳」という伝統への挑戦という以上の歴史的意義が含まれていた。まず、18世紀末には「ユニテリアン訳」出版への機運が十分に高まっていたということは、ユニテリアン主義的なプロテスタンティズムの形成過程において、*sola scriptura* つまり個々人の聖書へ対峙の仕方が、それぞれの理性的能力の自由な行使にもとづく、他の何物にも支配されない独自の解釈を推奨する傾向¹¹によりすでに確立されつつあったということを意味する。聖書的諸価値の相対

8 *Improved Version*, 563n.

9 *Improved Version*, 484n.

10 *Improved Version*, 62n.

11 Simon Mills, “Scripture and Heresy in the Biblical Studies of Nathaniel Lardner, Joseph Priestley, and Thomas Belsham,” Scott Mandelbrote and Michael Ledger-Lomas eds., *Dissent and the Bible in Britain, c.1650-1950* (Oxford University Press, 2013), 86, 106.

化および個人主義的な脱文脈化への合理主義的志向性がすでに構造化されていてこそ、何故三位一体論を放棄してもなお〈聖書〉と〈キリスト教〉に固執するのかという、ユニテリアン主義特有の問いが發せられるからである。したがってこの『改定訳』は、後述するような、教典を良心の呵責なしに自由に編集し、素朴に比較対照することを可能たらしめる自由主義的心性のひとつの現れであると見なすことができる。

また、『改定訳』を動機づけたのは、ユニテリアン主義の神学的自覚だけではなかった。英国国教会の権威——「39箇条」(1563年)とりわけ第1条～第5条における三位一体及びキリスト条項、第6条および第7条における正典条項に象徴される——に抵抗する様々な意志表示があった。例えば、北米植民地の非国教会化が対英独立に対する一定の支援的・追認的役割を果たしたことに力を得て、その神学的および学問的表現として『改定訳』が実現された、という見方も可能かもしれない¹²。非国教会派の知識人の間では、「欽定訳」への不満と改訂への期待は、『改訂訳』出版よりかなり以前から高まっており、ブリーストリー (Joseph Priestley, 1733-1804) による企画も実現間近まで進められていた¹³。『改定訳』出版に際して、実質的な編集者がベルシャム (Thomas Belsham, 1750-1829) であったことは知られていた。だが、その名を伏せ、独自の注釈を数々書き加えているにもかかわらず、あくまで「ニューカム訳」と

12 例えば、マサチューセッツでは19世紀ユニテリアンの母体となる会衆派が、ヴァージニアでは長老派とバプテスタが、それぞれ反国教会派の主力となっていた。北米植民地で最初の対英独立宣言 (1776年)、権利章典 (同年) および信教自由法 (1786年) を成立させた後者について言えば、ジェファソンら政治的有力者の理神論的な (あるいは功利主義的な) 宗教理念が非国教会派を支持する構図は、神学的には一見奇妙だが、政治的には合理的 (「敵の敵は味方」) なものであった。cf. John A. Ragosta, *Wellspring of Liberty: How Virginia's Religious Dissenters Helped Win the American Revolution and Secured Religious Liberty* (Oxford University Press, 2010); G. Adolf Koch, *Republican Religion: the American Revolution and the Cult of Reason* (New York: H. Holt and Co., 1933). 聖書英訳と諸教派の協力および反目に関する有益な歴史的概観を提供してくれる次の解説も参照のこと。Michael Ledger-Lomas and Scott Mandelbrote, "Introduction," in *Dissent and the Bible in Britain, c.1650-1950* (Oxford University Press, 2013), 1-37.

13 Joseph Priestley, 'A Proposal for Correcting the English Translation of the Scriptures,' *Theological Repository*, 4 (1784). ただしこれは、1791年の国教会派によるパーミンガム暴動の標的となり、ほとんどの原稿は彼の書斎や自宅とともに失われ、本人もフィラデルフィアへの亡命を余儀なくされることになった。

して刊行された。国教会派に対する神学的・政治的反抗心と、二級市民扱いされてきた非国教会派の猜疑心とのせめぎ合いの中で生み出された書物だったことがわかる。

2. ジェファソンの福音書

専門的な神学教育や文献学的訓練を受けていない非聖職者が、自らの理性のみにもとづいて聖書を解釈・編集したユニテリアン主義者の典型的事例に、通称『ジェファソン聖書』（1820年）¹⁴がある。ジェファソン（Thomas Jefferson, 1743-1826）とユニテリアン主義との親和的關係は、晩年にはよく知られていたものの¹⁵、彼が個人的に福音書を編集・作製していた事実は、没後70年近くを経てようやく明らかになったものである¹⁶。新約聖書からマタイ・マルコ・ルカ・ヨハネ各福音書の章句を缺で切り抜き、台紙に張り付け製本した手作りの「スクラップ聖書」のことである。希・羅・仏・英の四言語対訳84頁（つま

14 「イエスの生涯と道徳的教え」*The Life and Morals of Jesus of Nazareth, Extracted Textually from the Gospels in Greek, Latin, French, & English* (1820) のみを指す場合がほとんどだが、まれに「イエスの哲学」*The Philosophy of Jesus of Nazareth extracted from the account of his life and doctrines as given by Matthew, Mark, Luke, and John. Being an abridgement of the New Testament for the use of the Indians unembarrassed with matters of fact or faith beyond the level of their comprehensions* (1804) を含める場合がある（後者は現物未発見）。成立経緯に関する小論での記述については、Eugene R. Sheridan, "Introduction," in *Jefferson's Extracts from the Gospels: "The Philosophy of Jesus" and "The Life of and Morals of Jesus,"* ed., Dickinson W. Adams (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1983) を参照した。

15 「現世代のうちに、ユニテリアン主義が合衆国の一般的な宗教となることを、私は確信をもって期待しています」。James Smith 宛1822年12月8日付書簡。

16 自家製福音書の構想自体は、副大統領在任中の1800年頃からごく親しい知人にのみ明かしていた（ラッシュ（Benjamin Rush, 1745-1813）との往復書簡（1800年8月22日付、同9月23日付、同10月6日付、1803年4月21日付、に確認できる）。現物は、1895年のアトランタ国際博覧会で初めて「ジェファソン聖書 Thomas Jefferson's Bible」として展示された。1904年にはワシントン版（Washington, D.C.: Government Printing Office, 1904）として9,000部のコピーが連邦議会により発行され、1957年まで上院の新人議員に贈呈されていた（これには長老派牧師会から苦情が寄せられた）。2011年には修復後のカラーコピー版 *The Jefferson Bible* (Washington D.C.: Washington, D.C.: Smithsonian Institute, 2011) が発行され一般に流通している。解説 Harry R. Rubenstein and Barbara Clark Smith, "History of the Jefferson Bible" も分かりやすい。

り実質的に20頁程)の体裁で、イエスの誕生から死までが道徳的教訓を中心に整序されている。この「聖書」ではイエスによる道徳的教えが数々引用され、系図の省略や並行記事・重複記事の一本化などの簡略化が行われ、受胎告知、病氣なおし、死後復活などの奇蹟物語や超自然的な出来事が軒並み削除された、合理的に理解可能な「人間イエスの生涯と教え」として再構成されている。

具体的には、冒頭の誕生物語(1頁)における、イエスの名が「胎内に宿る前に天使から示された」(「ルカによる福音書」2:21)、「幼子はたくましく育ち、知恵に満ち」に続く「神の恵みに包まれていた」(同2:40)、「イエスは知恵が増し、背丈も伸び」に続く「神と人々に愛された」(2:52)が、それぞれ削除されている。また、安息日の癒しについて問う場面(40頁)や、離縁について教える場面(50頁)において、行われたはずの癒しの事蹟が省略されている(「ルカによる福音書」14:4および「マタイによる福音書」19:2)。さらに、イエスの死に続くはずの「地震やいろいろの出来事」(「マタイによる福音書」27:51-55)が省略され、ただ人々が見守っていた、とされている。兵士がイエスの遺体の脇腹を槍で突く場面(「ヨハネによる福音書」19:31-34)に続くはずの、「亘擧した者の証し」も省略されている。イエスは墓に葬られて(「ヨハネによる福音書」19:38-42、「マタイによる福音書」27:60)、物語が結末を迎える。復活物語(「ヨハネによる福音書」20-21章、「マタイによる福音書」28章)は全体が省略されている¹⁷。

『ジェファソン聖書』には、蔵書や書簡類を手掛かりに注釈も試みられているが¹⁸、文献学的な背景について、あるいは広義の神学思想について、その作製意図を知る手掛かりはかなり限定され不明な点が多い。素材となった版に関しては、英訳のみ、切り抜かれて穴だらけの現物がスミソニアン研究所に保存されている。仏訳はきわめて珍しい版で、現存するのは英国聖書協会所有の一冊のみとも言われる。ラテン訳は、ウルガタではなく逐語訳に近い、アントワープ・ポリグロトで知られるモンタヌス訳である¹⁹。ジェファソン自身の注記が

17 スミソニアン版には頁数のみ記載された空白の最終二頁が掲載されているが、何らかのエピソードを加えるつもりだったのか、単なる余白なのかは不明である。

18 Sheridan, "Notes to 'The Life and Morals of Jesus,'" *Jefferson's Extracts from the Gospels*, 299-314.

19 *The King James Version*, Dublin: George Grierson, 1791/1799; Jacob Johnson: Philadelphia, 1804. Jean F. Ostervald, *Le Nouveau testament Corrigé sur le Texte Grec*

皆無に等しく²⁰、英語聖書研究の分野ではたんなる珍品にとどまっているのもやむを得ないのかも知れない。記事省略の意図について、さしあたりは、ジェファソンがイエスの道徳的教訓を「肥溜め dunghill 中のダイヤモンド」と一度ならず呼んでいること²¹から素直に解釈し、イエスの生涯からすべての非合理を洗い落とし、輝かしい道徳的教訓物語に仕立て上げる（同時に簡略化して利便性も高める）こと、自らのユニテリアン主義的な神学のおよび道徳的信念と適合的なものにする、の二つないし三つとしておくのが妥当だろう²²。

(Paris, 1802). F. Wingrave, Johannes Leusden, and others, *H KAINH ΔΙΑΘΗΚΗ Novum Testamentum, Cum Versione Latina* (London: F. Wingrave, 1794). Sheridan, "Notes to 'The Life and Morals of Jesus,' *Jefferson's Extracts from the Gospels*, 299-300.

- 20 ただし、イエスの言行の時系列的整序には、ニューカムの *A Harmony in Greek of the Gospels, with Notes* (Dublin, 1778) が用いられたとの仮説が提出されている。Sheridan, "Introduction," *ibid.* 37. 本文中の注記については、唯一、イエスの磔刑の場面 (77頁, 「ルカによる福音書」 23:14) にラテン語のコメントが書き込まれているが、主題は宗教的なものではなく、イエス時代の死刑の法的根拠に関する文献についてである。いかにも法律家ジェファソンらしいと言える。
- 21 John Adams 宛1813年10月12日付書簡, Francis A Van der Kemp 宛1816年4月25日付書簡, William Short 宛1819年10月31日付書簡。
- 22 ジェファソンが聖書学およびイエス論に関するブリーストリーの著作に強く影響されていたことを忘れてはならない。 *A Harmony of the Evangelists in Greek, To Which Are Prefixed, Critical Dissertations In English* (London, 1777) ; *A Harmony of the Evangelists in English; with Critical Dissertations, an Occasional Paraphrase, and Notes for the Use of the Unlearned* (London, 1780) ; *An History of the Corruptions of Christianity* (Birmingham, 1782) ; *An History of Early Opinions Concerning Jesus Christ*, 4 vols. (Birmingham, 1786) ; *Socrates and Jesus Compared* (Philadelphia, 1803).

表1 『ジェファソン聖書』の目次構成

福音書章節	見出し
L2:1-7	Joseph & Mary go to Bethlehem, where Jesus is born.
L2:21, 39	he is circumcised & named & they return to Nazareth
L2:40, 42-48, 51, 52	at 12 years of age he accompanies his parents to Jerusalem and returns.
L3:1-2/Mk1:4/Mt3:4, 5, 6	John baptises in Jordan.
L3:1-2/Mk1:4/Mt3:4, 5, 6/Mt3:13	John baptises in Jordan./ Jesus is baptised.
L3:23	at 30 years of age.
J2:12-16	drives the traders out of the temple.
J3:22/Mt4:12/Mk6:17-28	he baptises but retires into Galilee on the death of John.
Mk1:21, 22	he teaches in the Synagogue.
Mt12:1-5, 9-12/Mk2:27/Mt12:14, 15	explains the Sabbath.
L6:12-17	call of his disciples.
Mt5:1-12/L6:24, 25, 26/Mt5:13-47 / L6:34, 35, 36/Mt6:1-34, 7:1-2 /L6:38/ Mt7:3-20, 12:35, 36, 37, 7:24-29	the Sermon on the Mount.
Mt8:1/Mk6:6/Mt11:28, 29, 30	exhorts.
L7:36-46	a woman anointeth him.
Mk3:31-35/L12:1-7, 13-15	precepts.
L12:16-21	parable of the rich man.
[L12:] 22-48, 54-59/L13:1-5.	precepts.
L13:6-9	parable of the fig tree.
L11:37-46, 52, 53, 54	precepts.
Mt13:1-9/Mk4:10/Mt13:18-23	parable of the sower.
Mk4:21, 22, 23	precepts.
Mt13:24-30, 36-52	parable of the Tares.
Mk4:26-34/L9:57-62/L5:27-29/Mk2:15-17	precepts.
Mk4:26-34/L9:57-62/L5:27-29 /Mk2:15-17/L5:36-38	precepts. parable of new wine in old bottles.
Mt13:53.-57	a prophet hath no honor in his own country.
Mt9:36/Mk6:7/Mt10:5, 6, 9-18, 23, 26-31/ Mk6:12, 30	mission, instruction, return of apostles.
J7:1/Mk7:1-5, 14-24/Mt18:1-4, 7-9, 12-17, 21-25	precepts.
Mt18:23-35	parable of the wicked servant.
L10:1-8, 10-12	mission of the LXX.
J7:2-16, 19-26, 32, 43-53	the feast of the tabernacles.

福音書章節	見出し
J8:1-11	the woman taken in Adultery.
J9:1, 2, 3	to be born blind no proof of sin.
J10:1-5, 11-14, 16	the good shepherd.
L10:25-37	love god & thy neighbor. parable of the Samaritan.
L11:1-13	form of prayer.
L14:1-6	the Sabbath.
L14:] 7-24	the bidden to a feast.
L14:] 28-32	precepts.
L15:1-32	parables of the lost sheep and Prodigal son.
L16:1-15	parable of the unjust steward.
L16:] 18-31	parable of Lazarus.
L17:1-4, 7-10, 20, 26-36	precepts to be always ready.
L18:1-14	parables of the widow & judge, the Pharisee & Publican.
L10:38-42/Mt19:1-26	precepts.
Mt20:1-16	parable of the laborers in the vineyard.
L19:1-28	Zaccheus, & the parable of the talents.
Mt21:1-3, 6-8, 10/J12:19-24/Mt21:17	goes to Jerusalem and Bethany.
Mk11:12, 15-19	the traders cast out from the temple.
Mk11:27/Mt21:27-31	parable of the two sons.
Mt21:33/Mk12:1-9/Mt21:45, 46	parable of the vineyard & the husbandman.
Mt22:1-14	parable of the king and wedding.
Mt22:] 15-33	tribute. marriage. resurrection.
Mk12:28-31/Mt22:40/Mk12:32, 33	the two commandments.
Mt23:1-33	precepts. pride. hypocrisy. swearing.
Mk12:41-44	the widow's mite.
Mt24:1, 2, 16-21, 32, 33, 36-39, 40-44	Jerusalem & the day of judgement.
Mt24:] 45-51.	the faithful and wise servant.
/Mt25:1-13	parable of the ten virgins.
Mt25:] 14-30.	parable of the talents.
L21:34-36/Mt25:31-46	the day of judgement.
Mk14:1-8	a woman anointeth him.
Mt26:14-16	Judas undertakes to point out Jesus.
Mt26:] 17-20/L22:24-27/J13:2, 4-17, 21-26, 31, 34, 35/Mt26:31, 33/L22:33-34/Mt26:35-45	precepts to his disciples washes their feet trouble of mind and prayer.
J18:1-3/Mt26:48-50	Judas conducts the officers to Jesus.

福音書章節	見出し
J18:4-8/Mt26:50-52, 55, 56/Mk14:51, 52/ Mt26:57/J18:15, 16, 18, 17/J18:25, 26,27/ Mt26:75 /J18:19-23/Mk14:55-61/L22:67, 68, 70/Mk14:63-65	he is arrested & carried before Caiaphas the High priest & is condemned.
J18:28-31, 33-38/L23:5/Mt27:13	is then carried to Pilate.
L23:6-12	who sends him to Herod.
L23:13-16/Mt27:15-23, 26	receives him back, scourges and delivers him to execution.
Mt27:27, 29-31, 3-8/L23:26-32/J19:17-24/ Mt27:39-43/L23:39-41, 34/J19:25-27/ Mt27:46-55, 56	his crucifixion/death and burial.
J19:31-34, 38-42/Mt27:60	his crucifixion/death and burial. his burial.

3. 「諸民族の聖書」と比較宗教

ボストンの「トランセンデンタル・クラブ」の機関紙『ダイアル』に、「諸民族の聖書 *ethnical scriptures*」と題するコラムが連載された（1842年7月号から1844年4月号まで）²³。東洋の諸宗教の英訳教典を抄録し解説を付したもので、米国における比較宗教の先駆的な試みであった。当時の編者エマソンの紹介文を引用しよう。

我々は本号において、ヘブライ語およびギリシア語の聖書以外の、人類最古の倫理的及び宗教的文書からの引用を掲載することに着手する。各民族は多少なりとも純粋な聖書 *bible* をそれぞれもっており、自己と他民族の聖書を賢明で敬虔な精神をもって突き比べること、異なる時代異なる種族の道徳的感情の偉大な表現、人生の指針、不可視なるものや永遠なるものに対する敬虔や自己放棄の充溢を、その民族の世俗的・歴史的・儀礼的部分に没入しつつ収集することは、これまでに誰も望んではいなかったし、可能でもなかった。早晩不可避となるこの事業が、文学ではなく宗教によって遂行されることを、我々は期待している²⁴。

「トランセンデンタル・クラブ」のメンバーはいずれも革新的なユニテリアン主義者の知己で構成されており、思想信条の垣根を越えた自由な知的サークルとして、最新の哲学的・科学的知識と文学的・宗教的霊性を相互に高めあう役割を担っていた。この企画には、18世紀から19世紀転換期のヨーロッパにおけ

23 ボストンやケンブリッジ周辺の知識人達が文学・哲学・宗教・社会問題について定期的に議論しあった「トランセンデンタル・クラブ」の会合は、1836年から4年間で計30回を数えた。のちにその知的媒体となった雑誌『ダイアル *The Dial: A Magazine for Literature, Philosophy and Religion*』は、1840年7月から1844年4月までボストンで季刊発行された。中心的人物は、ヘッジ (Frederic Henry Hedge, 1805-90)、エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-82)、リプリー (George Ripley, 1802-80)、オルコット (Amos Bronson Alcott, 1799-1888)、パーカー (Theodore Parker, 1810-1860)、フラー (Margaret Fuller, 1810-1850)、ソロー (Henry David Thoreau, 1817-1862) などで、エマソン、フラー、ソローが『ダイアル』編集を担当していた。cf. George W. Cooke, "The Dial: An Historical and Biographical Introduction, With a List of the Contributors," *Journal of Speculative Philosophy* XIX (July, 1885); Sarina Isenberg, "Translating World Religions: Ralph Waldo Emerson's and Henry David Thoreau's 'Ethical Scriptures' Column in The Dial," *Comparative American Studies: An International Journal* 11:1 (March, 2013).

24 *The Dial* 3:1 (July 1842), 82. 下線強調は引用者による。

る「東洋の発見」の成果を米国の読書人層に届けるとともに、宗教の新たな可能性を自由な比較という手法によって探求するという野心が秘められていた。

表2 「諸民族の聖書」に採録された教典

採録教典および『ダイアル』巻号頁	出典
Veeshnoo Sarma 3:1 (July, 1842) 82-85	Charles Wilkins, <i>The Heetopades of Veeshnoo-Sarma, in A Series of Connected Fables, Interspersed with Moral, Prudential, and Political Maxims; Translated from an Ancient Manuscript in the Sanskreet Language, with Explanatory Notes</i> (Bath, 1787).
The Laws of Menu 3:3 (January, 1843) 331-340	William Jones, <i>Institutes of Hindu Law: or, The Ordinances of Menu, According to the Gloss of Cullūca, Comprising the Indian System of Duties, Religious and Civil, Verbally Translated from the Original Sanscrit: with a Preface</i> (London, 1796)
Sayings of Confucius (Selected) 3:4 (April, 1843) 493-494	Joshua Marshman, <i>The Works of Confucius; Containing the Original Text, with a Translation, Vol. I., to which is prefixed a Dissertation on the Chinese Language and Character</i> (Serampore, 1809)
The Desatir 4:1 (July, 1843) 59-62	Mulla Firuz Bin Kaus, <i>The Desatir or Sacred Writings of the Ancient Persian Prophets; in the Original Tongue; Together with the Ancient Persian Version and Commentary of the Fifth Sasan</i> (Bombay, 1818)
Chinese Four Books 4:2 (October, 1843) 205-210	David Collie, <i>The Chinese Classical Work Commonly Called the Four Books</i> (Malacca, 1828)
The Preaching of Buddha (Selection) 4:3 (January, 1844) 391-401	Eugène Burnouf, <i>Introduction à l'histoire du Bouddhisme indien</i> (Paris, 1844) ²⁵
Hermes Trismegistus 4:3 (January, 1844) 402-404	Doctor John Everard, <i>The Divine Pymander of Hermes Mercurius Trismegistus, Translated formerly out of the Arabick into Greek, and thence into Latine, and Dutch, and now out of the Original into English</i> (London, 1650)
Chaldaean Oracles 4:4 (April, 1844) 529-536	Thomas Taylor, <i>Collectanea; or, Collections, Consisting of Miscellanies, inserted by Thomas Taylor in the European and Monthly Magazines, With an Appendix, containing Some Hymns by the Same Author, Never Before Printed</i> (London, 1806)

- 25 ビュルヌフの法華経仏訳を英訳し“White Lotus of the Good Law”の見出しを付したのは、ソローだとの指摘がある。Robert Kuhn McGregor, “Henry David Thoreau, the Asian Thread,” in *Thoreau's Importance for Philosophy*, eds., R. A. Furtak, J. Ellsworth, and J. D. Reid (New York: Fordham University Press, 2012), 204. ただし、出版の日付は『ダイアル』(1月)、ビュルヌフの『インド仏教史』(9月)で逆になっている。

1867年、ボストンのユニテリアンを中心に、「純粋な宗教に対する関心」「神学の科学的研究」「人間の宗教的本性と歴史の科学的研究」「宗教と倫理の科学的研究」を目的に掲げた超教派の知的ネットワーク「自由宗教協会」が設立された²⁶。初代会長フロシingham (Octavius Brooks Frothingham, 1822-1895) は、著書『人間性の宗教』(1873年)において、あらゆる民族の教典を結集し分類・整理した「包括的な魂の書」の必要性を説いている。人類に普遍的に共有されるべき「心」の書物「道徳的・宗教的感情の書物」という、「現代の自由主義者の寛容な精神」に相応しいこの企図が、しだいに実現しつつあることが記されている²⁷。約30年前のトランセンデンタリズムの運動に芽吹いていた東洋の諸宗教に対する素朴な関心²⁸が、ある普遍的な〈人間性の宗教〉を実践的に構築するための知的資源として、具現化しつつあったからである²⁹。

フリードリヒ・マックス・ミュラーの講義録『宗教学入門』(1873年)の巻頭に、エマソンのオックスフォード訪問を記念する献辞が記されている。さら

26 *Report of Address at a Meeting Held in Boston, May 30, 1867, to Consider the Conditions, Wants, and the Prospects of Free Religion in America, Together with the Constitution of the Free Religious Association here Organized* (Boston, 1867). 設立の直接的な発端は全米ユニテリアン教会会議の内部分裂であった。cf. Charles H. Lytle, *Freedom Moves West: A History of the Western Unitarian Conference, 1852-1952* (Boston: Beacon Press, 1952); Stow Persons, *Free Religion: An American Faith* (New Haven: Yale University Press, 1947).

27 Frothingham, *The Religion of Humanity* (New York: David G. Francis, 1873), 64-65, 74.

28 フロシinghamは、ニューイングランドのトランセンデンタリズムを、独仏英の観念論的哲学・神学・文学に比して実用的・宗教的な運動と見た思想史的自伝も著している。Octavius Brooks Frothingham, *Transcendentalism in New England: A History* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1959 [1876]), Chapter VI.

29 当時、ユニテリアン聖職者による世界の諸宗教を紹介する以下の出版が相次いでいた。James Freeman Clarke, *Ten Great Religions. An Essay in Comparative Theology* (Cambridge, 1871); Samuel Johnson, *Oriental Religions and their Relations to Universal Religion: India* (Boston: 1871) [同中国篇は1877年、ペルシア篇は1885年にそれぞれ出版されている]、Moncure Daniel Conway, *The Sacred Anthology (Oriental): A Book of Ethnical Scriptures* (New York, 1873). 同時代フランスの歴史学の分野では、ミシュレが同類の書物を著していた。Jules Michelet, *La Bible de l'humanité* (Paris, 1864). 大野一道訳『人類の聖書—多神教的世界観の探求—』藤原書店、2001年。「人類は、共通する一つの「聖書」の中に、絶えず自らの魂を託している。それぞれの偉大な民が、その中に、自らの一節を書き込んでいる」(I 訳書11頁)「こうして知識が拡大していけば、いっそうの不一致が見いだせるだろうと予測されたのに、逆に調和のほうが、しだいに姿を現してきたのである」(II-III 同12頁)。

に序文の最後に、米国における「比較神学」の急速な発展について言及があり、その貢献者として、トランセンデンタリズム、自由宗教協会、ユニテリアン主義に所縁を持つ人物のみが列せられている³⁰。米国ユニテリアン主義による「比較神学」の大胆な試みは、学術的な周到さと敬虔な精神が伴えば、という但し書き付きで、「世界の主要な諸宗教に関する比較研究」「諸宗教の科学的研究」³¹へと接近することができるとして、ミュラーは好意的に評価している。東洋の教典的発見および人間精神の共通普遍性という近代的理念の形成が、ユニテリアン主義と古典的比較宗教学の知的心性によって主体的に担われていたことを例証する事例であろう。

結語

ここまで大まかにたどってきた19世紀米国におけるユニテリアン主義の一系譜が、教典を主知主義的に非神秘化し、信仰の文脈から理性の文脈へと置き換えることにより、何か独特の神学的アイデンティティを確立した、と結論することは少々難しい。冒頭に19世紀末の日曜学校指導書における聖書に対する両価的態度を紹介したが、〈自由という信条〉の逆説は、産業化や移民急増という時代的・社会的背景とも重なり合うことで、個人の宗教的な解放や回心、信仰の確信よりもむしろ、世俗的な社会秩序の維持と改良の方向へと促した³²。カルヴァン主義的決定論に対し理性と自由意志をもって正面から抵抗してきた

30 Friedrich Max Müller, *Introduction to the Science of Religion, Four Lectures, Delivered at the Loyal Institution, with Two Essays on False Analogies, and the Philosophy of Mythology* (London: Longmans, Green, and Co., 1873), ix. 以下の名が挙げられている。James Freeman Clarke (1810-1888), Samuel Johnson (1822-1882), Octavius Brooks Frothingham (1822-1895), Thomas Wentworth Higginson (1823-1911), William Channing Gannett (1840-1923), John White Chadwick (1840-1904), Francis Ellingwood Abbot (1836-1903)。

31 Müller, *ibid.*, vii. それでもなお、「比較神学」と「宗教の科学」とを区別している点は興味深い。

32 米国の「社会的福音運動」におけるユニテリアン主義の先進性と、信条不問の行動主義との関連性については、Charles H. Hopkins, *The Rise of the Social Gospel in American Protestantism: 1865-1915* (New Haven: Yale University Press, 1940) を参照。「私的プロテスタンティズム」「公的プロテスタンティズム」の類型については、Martin E. Marty, *Protestantism in the United States: Righteous Empire*, 2nd. ed. (New York: Charles Scribner's Sons, 1986 [1970]), 177-86 を参照。

その神学的背景と、ニューイングランドの知的エリートを母体とした *nobles oblige* の市民的心性とによって、教典を「教育・博愛・社会改良」の手段とする実用主義的解釈学が生み出された、と言うことはできるかもしれない。

近代市民社会と親和的な「比較神学」へと駆り立てた米国ユニテリアン主義の宗教的心性は、知的かつ実践的な体系としての「人間性の宗教 Religion of Humanity」の語に表象される19世紀の進歩的人間理解と共鳴していた。小論で例示したような、近代宗教学の前史およびその哲学的エートスの形成史は、米国宗教思想史研究の観点から、より詳細な見直しが必要となると思われる。

〈付記〉本研究は科研費（課題番号：26770025）による成果の一部である。

Scriptural De-Contextualization and American Unitarianism in the Nineteenth Century

Ippei SHOJI

This article sketches historical phases of scriptural translations, editions, and comparative studies by American Unitarians in the nineteenth century. A Unitarian revision of the English New Testament in the late eighteenth and the early nineteenth century disposed British and American dissenters to de-mystify and de-contextualize the authoritative texts and creeds of the Church of England; Thomas Jefferson's Bible introduced a private style of free inquiry and rational interpretation of the Gospels, without reference to supernatural Trinitarian theology or divine intervening; Ethnical Scriptures anthologized by New England Transcendentalists pioneered comparative theology in the United States, inducing Unitarians into free religion and the religion of humanity since the 1860s, which had been consonant with the theological and philosophical ethos of early scientific study of religions.